

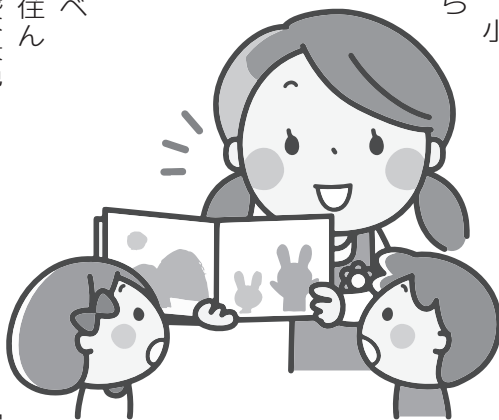


子育てチャンネル

おはなしと人形劇

昔むかしのことですが、私は小学校入学直前に、千葉の人混みから伊豆の山奥に引越しました。そこは木々の間に早春の山の花がたくさん咲いていたので、叔父は植物図鑑をプレゼントしてくれ、周りが山に囲まれていたので、母は「アルプスの少女ハイジ」の本を買ってくれました。おかげで、風がビュービュー吹く山の嵐もハイジと同じだから、と難なく過ごすことが出来、夕焼けに染まるバラ色のアルプスの山々の描写に、憧れの夢を楽しく持つことができました（バラ色に染まる山の姿は東川に来てやっと分かりました）。

小学校4年生の時の先生は、時々授業そっちのけでいろんな本を読んでくれました。いつもは騒いでいる男子も、シーンとして物語に引き込まれ、笑い合い、皆で本のおもしろさを共有する楽しさも知りました。小学校時代暮らした野山を思い出すと、ピーターラビットやチムラビットが遊び、妖精が舞い、動物たちがしゃべり、小人が住んでいる不思議な景色も一緒に浮かび上がり、本の中の登場人物も歩いているような気がします。子どもの時に触れた本や物語は宝物のようです。周りの環境や人間関係に、素敵な物語がどれだけ膨らみを持たせてくれた



かと思うとき、そういうものを与えてくれた両親や周りの人に感謝せずにはいられません。その半面、自分の子どもたちに対しては…。私は、自分の子どもが小さいころ、自分のやりたいことや、または生活に追われ、どれだけのことができたか？と後悔の念でいっぱい。今ごろになって「しまった！」と思っています。寒い部屋の寝床で、手が凍るような思いをして絵本を読み、電気を消した部屋で作り話や物語を語り聞かせていたこともあったけれど、ほとんどは途中で私の方が先に寝てしまっていたような…。私の子どもたちは大分大きくなっ

てしまったけれど（今もまだ戦いの最中ですが…）、今になっていろいろ考えると、不十分で余裕のない親があたふたしている間に、周りが声をかけ、気にかけて、育ててくれていたと感じています。幼児センターの子どもたちには、世界はまだ未知のことではない。3歳未満の子どもは、支援センターの子どもたちの前で人形劇を上演する時、操作する人形の隙間から時々子どもたちの顔を覗いて見えています。とてもキラキラした目、真剣に人形の動きを追っているつばらな瞳！人形の気持ちと一体になつてくれていると感じ、心が温かくなります。どうかこの子どもたちが心豊かに育ってくれますように、とこれからも祈り続けていきます。

人形劇団フレップ代表

加藤 順子